

Circulating

Local

Practices

# めぐり めがらす

## ローカルの実践

北海道 上川町・株式会社EFC  
風土を耕す、小さな企業の物語



「ここだからできる」  
を信じて。



## はじめに

小さなまちだからこそ、できることがある。  
小さなまちでしか、できないことがある。

そう信じて活動を続けてきた企業が、北海道上川町にある。株式会社EFCだ。仲間とともに団体を立ち上げ、町民の声に耳を澄ませ、このまちで正直に試行錯誤を重ねてきた。実験と失敗、対話も喧嘩も何度も繰り返し、とにかく泥臭く前に進む。町の外からやってきた「風」の人であるはずなのに、不思議なほど「土」の匂いをまとい、この土地に根を張ろうとしている。その実践の積み重ねで生まれたのは、新しい「まちの風土」の芽生え。小さくはあるが確かに、まちの空気は変わり始めている。それは、「彼らが来たから変わった」ではなく、「自分たちにもできるかもしれない」という感覚だ。

この冊子では、過疎地域でありながら不思議と盛り上がりを見せている上川町において、カギとなる民間企業EFCの活動に注目。思考をめぐらせ、関係をめぐらせ、風土を耕し続けてきた実践の記録だ。活動を振り返りながら見えてきたのは、まちへの真っ直ぐな愛情と、特別ではない小さなアクションを、一つひとつ積み重ねる力。まちづくりに「正解」は存在しないが、本書に記した歩みが、各地の小さなまちで実践に関わる人たちのもとへ新たにめぐり、次の一步のヒントとなることを願っている。



- もくじ
- 01 はじめに
  - 03 上川町って、こんなまち
  - 04 EFCって、こんな会社
  - 05 第1章 信頼を長く続ける距離感の作り方
  - 07 第2章 「成功」よりも大事な「失敗」たち
  - 09 第3章 「耕し続ける」ための場づくり考
  - 11 今と、これから
  - 13 EFCへひとこと！仲間たちの声
  - 14 おわりに

Circulating

Local

Practices



# 上川町って、 こんな町

北海道の中央部に位置する上川町は、人口約3,013人（2025年12月末時点）、面積1,049km<sup>2</sup>を有する自然豊かな町。大雪山国立公園の北側に広がり、町の面積の約9割を森林が占める雄大な環境が特徴。旭川市からは車で約1時間、札幌からは車で約2時間半ほどの距離にあり、主要観光地は層雲峡温泉や、大雪山の黒岳など。産業は温泉や自然アクティビティを中心とした観光業が中心で、農業や林業も根づく。

## 産業

- 農業 [米、野菜、酪農]
- 観光業 [層雲峡温泉、大雪山]
- 林業

## 人口

約3,013人

## 面積

1,049 km<sup>2</sup>

## アクセス

- ✚ 東京から旭川空港 1時間40分
- 🌾 札幌駅から上川駅 約2時間5分
- 🚗 旭川・上川間 約1時間15分

## 行政との企業連携

上川町の強みは、行政が外へ挑戦し続ける姿勢と、民間を柔軟に巻き込む力。EFCとの連携もその延長にあり、行政と民間がそれぞれの強みを生かしながら、町の未来を形づけている



## 移住者コミュニティ

上川町では近年、移住者がゆるやかに増えている。自然環境との距離感や町の規模、挑戦を受け止める空気が人を惹きつける。町民同士の混ざり合いが自然と生まれ、多様な広がりを見せている



## 道内屈指の観光産業

層雲峡をはじめとする温泉地や大雪山の山岳景観、四季の自然体験は、年間を通じて人を呼び込む北海道屈指の観光資源である。観光がもたらす外からの視線により、開放的な空気が流れることも特徴





efc .INC

## EFCって、 こんな会社



EFCは、「ここだからできる」をつくる」をスローガンに、北海道上川町を拠点に活動するローカルベンチャー。2021年に法人化されて以来、過疎や人口減少、高齢化といった地方特有の課題を、「行政まかせ」ではなく、地域と関係人口、民間プレイヤーを巻き込んで「共創」で取り組むスタンスを貫いてきた。人が関わり、集まり、時間をかけて、地域を前向きに思える風土をつくる、そんな会社だ。

### VISION

“ここだからできる”  
地域社会を実現する。

### MISSION

課題に対する適切な  
“場づくり”と“関係づくり”。

### VALUE

ローカルで共に暮らし、  
共に汗をかく。

### 官民連携事業

2025年2月に、上川町と「未来共創パートナーシップ協定」を締結、官民共創による課題解決・価値創造を強化。関係人口創出や情報発信、移住促進など多岐に渡り、町の構造的課題にも取り組む



### 宿泊事業

「ANSHINDO」等の複数の宿泊施設を企画運営。滞在と生活、地域体験を繋ぐ場として、観光客から移住希望者まで受け入れ、「まちの拠点」「暮らしの入り口」「地域との接点」として運用中



### コミュニティ事業

交流スペース「PORTO」を運営。住民、移住者、観光客などが交わる場をつくる。地域の中の人と外の人が重なり、コミュニティの中で関係性を育てる取り組みも担う



# 信頼を長く続ける

## 距離感のつくり方

EFCメンバーと共に、行政の立場で伴走してきたのが、現・上川町長の西木光英さんだ。協働はどのようにはじまり、信頼へと育ったのか。行政と民間が対等な関係を保ちながら、長く続けるために必要な視点を聞いた。

上川町長

西木光英

上川町長。1968年上川町生まれ。総務課や税務、教育委員会、商工観光課などを経て現職。

EFC 代表取締役

志水陽平

1990年旭川市生まれ。北海道庁職員、ゲストハウス運営などを経て、2024年より現職。

EFC 取締役

絹張蝦夷丸

1990年浦別町生まれ。2019年に地域おこし協力隊として札幌から移住。2024年より現職。

「壊す施設」からはじまった場づくりと関係づくり

—町長とEFCが関わるきっかけは？

西木 「層雲峡ユースホステル」の再活用のタスキミングですね。元々ここは、管理委託先が撤退した後の遊休施設で、解体・撤去予定でした。そこに、元北海道庁の自然環境担当だった志水くんが「ゲストハウスとして使わせてもらえないか」と、当時の担当課長補佐だった私に打診をしに来て。町としては「壊す」方針で、正直乗り気ではなかった。建物がひどい状況だったから、一緒に中を見れば諦めるだろうと思ったのですが、現地で志水くん「躯体はしっかりしているから、直してなんとか使えませんか？」と言われて。それで困って…。最初は諦めさせようと、一度放っておいたんです(笑)

一同 (笑)

西木 でも、その後「どうになりましたか？」って電話が何度もきて。彼の熱意にも押された部分もあります。実は私も現場を見て話した後、「何かに活用できるかも」と思っただけで、それで「償のこ」ただけでなく、層雲峡全体を活性化する視点で企画書を書ける？」と投げたから「作ります！」と即答してくれた。建物だけでなく「地域全体をどう変えていくか」を描いた企画書を持って、佐藤前上川町長へ直談判しに行きました。そしたら前町長は「こういう若い人を待っていた」と即決でしたね。

志水 「放っておいた」と言いつつも(笑)、西

# HISTORY

2014-2020

## 第1章

仲間と動き出し、上川町と出会い、試しながら関係をつくってきた最初の時間

2014年

任意団体「Earth Friends Camp」発足。アウトドアやキャンピングイベントをきっかけに、仲間内の活動としてスタート。当初は「会社」や「まちづくり」を目的としたものではなく、自然と人をつなぐ場づくりが出发点

2018年

4月—志水陽平が旭川市から上川町に来て個人事業「層雲峡ホステル」をスタート





木さんはことあるごとに「やってみな、役場の方はなんとかするから」と言ってくれてましたよね。

**西木** ゲストハウスのプレオープンの際に呼んでくれて、「お試し宿泊」って言って、当時の担当者たちと一緒にパーティしたのは楽しかったよね(笑)

**志水** 改装の困難も含めて近くで見られて、あの時に乾杯したこと、今でも思い出します。

—その後、絹張さんたちも地域おこし協力隊として上川町に移住します。

**西木** 上川町として、移住定住の推進で地域おこし協力隊の活用をはじめた時期で、私も担当課の課長になっていた。絹張くんは、その最初の協力隊として赴任して、企画をどんどん投げてくれていました。

**絹張** 今振り返ると、役場は迷惑だったと思いますよ(笑)

**西木** 役場がそれに応えきれなかった部分はあるけど、エネルギーは感じていました。それまで、町が本場に寂しい雰囲気だったので、こんな小さな町の空き店舗を活用して、新しい場を開いてくれる勇気がすごく嬉しかった。

当時は「協力隊って、何やってるの?」って町民の疑いの目もありましたが、その協力隊に対しての信用も作ってくれた。

**志水** 「場」を持つことはやっぱり町の人たちの信用に繋がる。元々住んでいる方々とも対等というか、同じ目線になれる気がします。

**任せすぎない、依存しない  
信頼が続く距離感をつくる**

**西木** 外への活動も積極的だったのも印象的です。町外の人たちから、特に絹張くんの名前を聞くことが増えましたね。

**絹張** 「外で高く評価されている」という事実があれば、役場の人も町民に説明しやすいし、僕らも活動しやすくなる。「役場の人が批判を受けにくい状態を作ることが、結果として僕らの信頼に繋がると思う」、そこはしたたかに動いていましたね(笑)

**西木** 私も当時担当課長として、「外から来た人ばかり支援している」と言われることもありましたが、彼らが目に見える形で動いてくれたおかげで、EFCの活動を応援する大義名分もできていきましたね。

—役場とEFCとの「距離感」は、どんな感じだったんですか?

**西木** 覚悟を持って活動してくれているのは明白だったし、仕事をお願いしたいという思いはあった。ただ、最初の方は時に、EFCから「あまり役場に依存したくない」と仕事を断られることも結構あって。

**絹張** 本当は喉から手が出るほど仕事が欲しい(笑)。けど、行政の仕事の比重が大きくなる、会社の生命力が弱まってしまふ。民間事業者が自立して開発をしているからこそ、町は成り立つと思っています。だから、まずは自分たちの事業で収益を立てることにはこだわっています。今は、EFCが「自分たちがやるべきだ」と納得できる仕事を、役場と一緒にできるようになってきたと思います。「何でも屋さん」になると、もつといい仕事ができる人が上川町に入ってきてづらくなると思いますし。

**西木** 行政職員も「EFCにやってもらおう」という期待感はあるけど、EFCは「御用聞き」じゃないし、いい関係を続けるための心地よい距離感は絶対に必要。関係を保ちながら、会社としてしっかり稼いで、続けてもらうことが何より重要だと思えます。

**志水** 本当にそうですね。僕たちのやり方で、この小さな町でもやっていけることを証明したいです。

**絹張** だからこそ、町の中も外も含めて、一緒に頑張れる人を増やしたいですね。EFCがやっているような町との関わり方を、一緒に実践できる仲間を作りたいと思っています。

2019年

4月・絹張環美丸、絹張育美、水口加奈子、近江美久のEarth Friends Campメンバー4名が札幌から上川の地域おこし協力隊にKAMIKAWOKPRO JECTなど、まちの外中をつなぐ施設・企画づくりに携わる



2020年

協力隊として複数の事業・現場に関与。観光・イベント・情報発信などを通して、「行政と町民の温度感の差」や「やりたいことを受け止める土台が足りない」という町の課題が浮き彫りに。この時期の経験が、後の「場づくり」「法人化」への問題意識につながっていく

# 成功よりも

Failures More Important Than Successes

# 大事な失敗たち

元EFCコミュニティマネージャー。2024年退社。現在は上川町の社会福祉協議会のスタッフ



中川 春奈



大村 優介

EFCのコミュニティマネージャーとして、上川町PORTOを運営する。2024年より、上川町議会議員としても活動

PORTOは、上川町の中心部にある交流スペース。まちの内と外をつなぐ、「港」のような場所として名付けられた。移住者、町民、旅人、行政職員など、立場や目的の違う人たちが日常的に行き交い、理由がなくても立ち寄れる余白を大切にしながら、自然に言葉をお互いに交わす場として開かれている。PORTOは、現在のEFCの活動において原点となる場でもある。



2021年にスタートした、EFCにとって重要な場所であるPORTO。オープンからの3年間は、まちに対してEFCたちが何ができるかをここで実験し、試行錯誤を繰り返す期間だったという。当時PORTOの運営を任されていたEFCスタッフにインタビュー。答えのない中で手足を動かし続けてきた二人の視点から、「地域コミュニティ」を耕すうえで重要なことを聞いた。

## 収益性 よりも 理念

Case 1

PORTOは、事業として見れば決して効率のいい場ではない。大きな収益を生むわけでもなく、公共性の高い場づくりは手間も時間もかかる。それでも続けてきたのは、EFCにとって活動全体の理念や土台を耕す場所だったから。スタート時はコワーキングやショップ機能による売上目標を立てて、単体での収益化を模索してきたが、「利益」に向かえば向かうほど、当初の目的だった「まちの人の『やってみよう』を伴走することや『ありのままにいられる居場所』から遠ざかっていることに気づく。

ビジネスとコミュニティスペースとしての意味合いを生み出すことの両立はやっぱり難しく、今は「単体での収益化」を手放しています。ぐるぐるの試行錯誤をしながら、今の時点ではこの形に（大村）。

すぐに利益にならなくても、上川町での関係や信頼を育てることが、次の事業や挑戦を支えていく結果となった。



## HISTORY

2021-2023

### 第2章

失敗を重ねながら思想が育った時期。EFCの役割が「企画者」から「まちの中間支援的存在」へ

2021年

6月「綱張、志水、水口の3人で株式会社Earth Friends Camp設立（法人化）。スローガンは「Being outdoor makes our lives better」。任意団体や個人活動では受けきれなくなった町からの業務を引き受けるため、アウトドア事業と行政委託事業の2軸で法人化

10月「交流スペース「PORTO」オープン。町民、移住者、旅人、行政、外部人材が交わる「港」としての場が誕生。当時はPORTOの運用は上川町役場から3年が期限とされていた

2022年

4月「実績報告を公開する「PORTOの大報告会」を開催



## イベント

## よりも生活

Case 2

人を集めるためのイベントは、短期的な成果を生みやすい。一方で、まさに風土として残るのは、日々の「生活」のなかで繰り返される関わり合いだと、PORTOの活動を通して実感する。これまでイベントも数多く実施してきたが、今は暮らしの中の関係性や関わり合いや言葉をつぶさに見ていく。学校帰りに立ち寄る、仕事の合間にコーヒーを飲む。そうした生活の延長線に居場所があることで、他者と関わるこ

心を開いてるわけじゃなさそうな高校生が、急にポロツと深い相談をしてきくれたことがあって。吐露しづらいそうした思いや言葉は、常に開かれている場じゃなきゃ出てこないと思うんです。私たちの活動が、町民の生活の中にきちんと入れた感じがあって嬉しかった(中川)。



意味もなく、何気なく集まれるというような「日常」が空間に存在して初めて、町民の生活に馴染んでいく。

## 企画力

## よりも熱量

Case 3

地域づくりの現場では、企画の完成度やアイデアの新しさが評価されがちだ。EFCも当初は、自分たちで様々な企画を立ち上げて運営をしてきたが、しかし、どれだけ考え抜いた企画であっても、自分たちだけで回し続けることには限界があり、次第に熱量が続かなくなる場面もあった。完璧な計画があっても、現場に立つ人の「楽しい」や「やりたい」がなければ、活動は長く続かない。「社会的」にやったほうがいいことには、実はあまり意味がないのだ。

最近おばあちゃんがPORTOで靴下を売りはじめたんです。ちゃんと自分で想いを持っているから、商品が増えていくし、いろんな人が集まってくる。今は、来る人たちの日常会話の中でその人の「火種」を見つけて、その熱を大きくしていくイメージ(大村)。



企画の内容がすごいとかどうかより、その人自身が心からやってみたくて思っているかどうか。斬新でなくても、うまくなくても、小さくでも続けてると信頼は生まれていく。

## ルール

## よりも対話

Case 4

場を運営するうえで、ルールを決めればトラブルは減る。しかし、EFCは規制することで管理するよりも、当事者との対話を重ねることを選んできた。「遊びたい小学生と勉強したい高校生の声の大きさが問題になったとき、それぞれに「どう思う?」と聞くようにしています(大村)。そうしてお互いの意見を重ねて、その時々で落とし所を見つけていく。

昨日と今日で対応が違う、ということも発生します。でもそれが話し合いのきっかけになるから、その違いは良いことだと思えます。「こういうものだから」じゃなくって、「なんで自分がこうするのか」を考え続けなければいけない(中川)。



価値観の違いは避けられないからこそ、その都度言葉を交わし、関係を結び直す。手間はかかるが、その過程が場の空気をつくり、安心感が繋がる。PORTOは、管理された場所ではなく、対話が行き交う場所であり続けている。



2023年

1月—PORTOにて、現在も続く月例マルシェがスタート

2月—PORTOリニューアル。このタイミングで、ショップ機能を大幅に拡充。機能・運営体制を見直し、より開かれた場を目指す

3月—「リビセン」に聞く！ エリアリノページのすすめ開催

10月—PORTO、1周年記念イベントを開催。精張の協力隊任期満了(コロナで半年延長)水口が役員を退任。  
11月—綱張が個人事業「KINUBARICOFF EROASTERS」をオープン。後のANSHINDOになる安心堂薬局を競売にて取得

# 耕し続けるための 場作り考



絹張

蝦夷丸

1990年生まれ。北海道・オホーツク・湧別町出身。2019年に札幌市から上川町へ移住し、多くの地方創生事業に携わる。2021年に(株)Earth Friends Campを創業(2024年に㈱EFCに社名変更)。2022年にロースタリーカフェKINUBARI COFFEE ROASTERSをオープン

## うまく循環する 「場の役割」を 設計し続ける

「場」をつくるうえで本当に大切なのは、その場がまちの中でどんな役割を担うのかを考へ続けることだ。PORTOは、人と人との関係性を耕すための場として生まれ、確かな手応えを得てきた一方で、「続けていくこと」の

## 思想基盤

01  
PORTO

### 価値観や目線を合わせる場所

PORTOは、EFCにとっての活動の姿勢や価値観を形にした場所だ。立場や年齢の異なる人が自然に交わり、関係がゆっくり育っていく。そのプロセス自体を大切にすることが、PORTOには込められている。短期的な成果や効率ではなく、対話を重ねながら町と関わり続けられる時間と場を守ること。その積み重ねが、EFCの活動全体を支える「風土」や信頼の基盤となっている。

宿をつくる」という発

想ではなく、まちで育まれて

きた関係性や日常そのものを価値

として届ける「生活観光」という

考え方。暮らしの延長にある場所に泊

まり、人と出会い、まちの時間を体験し

てもらおう。その受け皿として生まれたのが

ANSHINDOである。ANSHINDO

は収益を生む拠点であると同時に、

PORTOで育ててきた思想やコミュニティ



### 第3章

2023-2025

HISTORY

耕した関係を次に繋ぐため、ANSHINDOを基盤としながら、場と事業を組み直していく

#### 2023年

4月—ANSHINDOプロジェクト始動。旧建物を活用した「泊まれる複合施設」構想が具体化  
5月—経済産業省「面的地域価値の向上・消費創出事業」を採択  
8月—旧安心堂の工事スタート

#### 2024年

10月—ANSHINDOクラウドファンディング、目標300万でスタート  
11月—ANSHINDOクラウドファンディング終了。370万円が目標を達成(クラウドファンディングアワードでW受賞)

#### 2024年

2月—長野・諏訪のリビリティングセンターと壁塗りワークショップ開催  
3月—ANSHINDOラボオープン。宿泊・シェアオフィス・交流機能を先行稼働  
6月—社名を「株式会社EFC」に変更/代表交代。志水陽平が代表に就任



## 思想や実践を、外に出していく

研修・視察の受け入れや行政コーディネートは、EFCが積み重ねてきた実践を外にひらく取り組みだ。現場で得た知見を共有し、他地域や行政と対話を重ねることは、新たな収益機会であると同時に、自分たちの活動を見つめ直す機会にもなる。答えを教えるのではなく、試行錯誤の過程を手渡す。その姿勢が、新しい関係や協働を生み、EFCの活動領域を静かに広げている。

## 03 関係づくり

研修・視察／行政コーディネート

難しさにも直面してきた。公共性の高い場づくりは、すぐに収益へと結びつくものではない。理念を大切にすればするほど、運営の負荷は増し、持続可能性が問われる。EFCが次に向き合ったのは、PORTOのような場をどうすれば残し続けられるのか、という問いだった。

上川町は、北海道有数の観光地を抱える町でもある。そこでEFCが選んだのは、「観光地だから」

を、観光の文脈につなぐ装置でもある。

ANSHINDOは、EFCの「やりたい」を続けるために選んだひとつの手段。公共性の高い実践を残すには、自分たちなりの「稼げる形」を持つことが必要だった。交流の場をつくって終わらせないために、どんな一手を打つのか。その土地への敬意と覚悟をもって、循環を設計し続けることが、場づくりには求められる。

## 02 場づくり

ANSHINDO／層雲峡ホテル

### きちんと稼ぐ、会社の土台

ANSHINDOや層雲峡ホテルは、需要をつくる実践をしながら、それぞれの活動を支える収益の柱として位置づけられる。ANSHINDOは、1階がカフェバーとギフトショップ、2階がマイクロホテル、3階がシェアオフィスという「泊まれる複合施設」として機能。宿泊事業は、滞在を通じてまちの魅力を伝えると同時に、日々の運営を支える現実的な収入を生み出す。会社の理念を守り、拡張させるための装置でもある。



2025年

2月—上川町と「未来共創パートナーシップ協定」締結。行政と民間が対等なパートナーとして、関係人口創出、移住促進、起業支援、場づくりを進める枠組みを明文化。研修・視察受け入れ、行政コーディネート事業が拡張。上川町で培った実践知を、他地域へ展開するフェーズへ

5月—ANSHINDOの隣に、地域おこし協力隊卒業生が「積分堂」をオープン

10月—北海道経済産業局主催、上川町・株EFC協力、地域交流会ローカルにおける持続的なまちづくり開催

6月—株式会社Huuiuの徳谷柿次郎が社外取締役就任。志水の個人事業である「層雲峡ホテル」をEFCの宿泊事業に統合。観光地・層雲峡エリアでの宿泊事業を、EFCの「中核事業」として位置づける

6月—ANSHINDOグランドオープン。まちを照らす灯台」をコンセプトに、本格始動。同時にローカルキャリアサミットを開催

6月—KINUBARICOFFEEの2号店、Bagei & Herbertea hibbiがANSHINDOのテナントとしてオープン

日常

大切にするのは、  
何よりも生活。

地域に関わることのスタートは「特別な活動」ではなく、「暮らし・生活」からはじまることを忘れない。上川町でPORTOが根づいたのは、日常の居場所としても開かれていたから。遊びや学び、食事や休暇を共にし、お互いのことを少しずつ知る。小さな繋がりがや関わり合いが、次第にまちの中をめぐりはじめる。

視点

風を吹かせて  
新しい視点に気付く。

同じ景色でも、外の目線が入ると見えていなかった価値が立ち上がることも。「ここがこのまちの面白さ」という目線が、次の動きを生んでいく。別のまちを見に行く、違う立場の人の声を聞く。答えを探すより、同志や視点を増やすこと。風が吹けば停滞がほどけ、次の一手が自然に現れることもしばしば。

出会いを大切にし、  
関わりながら土を耕す。

関係は一度つくって終わりではない。挨拶する、声をかける、頼る、手伝う。小さな接点を増やすほど、まちの土は耕される。いきなり大きな企画を持ち込むより、顔を覚える、雑談をする、相手の暮らしの時間を知る。摩擦があっても、話し合うことで結び直す努力をする。その繰り返しが信頼になり、次の出会いに繋がる。

関係

上川町でEFCが重ねてきた実践は、「まちづくりの正解」を持って始まったものではない。観光地として知られながら人の流れが通過してしまふこと、挑戦が点で終わってしまうこと。そんな目の前の違和感に向き合い、「じゃあ自分たちでやってみよう」と動き出した積み重ねが、今に繋がっている。その実践を重ねる中で、少しずつまちへと視点は広がっていった。土台になっているのは、まちの人々の生活。まちの時間の流れや暮らしのリズムを無視して、企画だけを走らせても続かない。PORTOは日常の関わりを大切にし、理由がなくても立ち寄れる余白を守りながら、関係を

## 循環

「自分もできるかも」  
知識と経験をめぐらせる。

経験は抱え込まず、言葉にして手渡す。上川町でも、場の運営や試行錯誤が共有されることで、新しい店や企画が生まれやすくなってきた。小さな成功も失敗も、記録し、語り、伝える。「自分もできるかも」が増えると挑戦は属人化せず、まちの中をめぐり続ける。そうして風土は静かに更新され、めぐっていく。

EFCが目指す、  
小さな地域の  
風土づくり

## 継続

協力、支援、応援。  
続ける仕組みをつくる。

続けるには仕組みも大切。役割を分け、頼り、支え合える形をつくる。ANSHINDOや層雲峡ホテルの収益を、EFCの活動の土台にしたように。お金も人手も一人に背負わせない。継続は「誰かの善意」だけで成り立たない。支える側も無理のない仕組みをつくることで、応援が循環し、活動はまちの中に残りやすくなる。



わからなくてもいい。  
まずは楽しくやってみる。

最初から正解を決めなくていい。小さく試して、反応を見て、直していく。楽しく続けられるサイズ感で、まず一回やってみることが大切だ。地域には「こうあるべき」が多いが、正解探しに時間を使いすぎると、動き出す前に疲れてしまう。まずは小さく始めて、楽しさが残る範囲で回しながら、続けられる形にしていく。

耕してきた場所だ。それを長く続ける仕組みとしてのANSHINDOは、単なる宿泊施設ではなく、人と出会い、まちの時間を体験してもらう「生活観光」の受け皿としても機能している。「自分たちでやってみよう」からスタートした活動は、いつの間にか拡がり、ぐるっと一周まわってまちのために稼ぐ事業に。ロマンとそろばんのバランスを状況に応じて変えることは、続けるための重要な要素だ。

関係を育て、実験し、続ける形をつくり、経験を外にひらく。きつとうまくいかないこともある。だから、めぐらせながら、その時に合う動きを選んでいく。上川町の実践は特別な成功例ではないが、小さく始めて時間をかけて積み重ねることで、風土は着実に耕され、変化していく。その経過には、どのまちでも置き換えられるヒントがあるはずだ。

## 実験

# EFCへひとこと! 仲間たちの声



徳谷  
柿次郎

株式会社Huuuu代表取締役、ほぼ何もしていないEFC社外取締役でもある。最近では作家/編集者として出版事業を頑張っている

何度も通っている北海道の中でもEFCの立ち位置は特殊です。旭川空港からの距離感と大雪山との関わり。人類がいずれ辿り着く土地で、ローカルに根を張る。世の中よりも少し早い打ち手なので、10年後にはすべて帳尻が合うと思う! 粘ろう!



小野  
裕之

編集者・プロデューサー。2020年には現代版商店街「BONUS TRACK」を下北線路街にて開業。2025年夏、創業支援型複合施設「HOME/WORK VILLAGE」をプロデュース

飲食店や宿の直営事業(理想は追求しやすい一方で、事業規模が立地に規定される)と、行政や企業からの委託事業(最終決定権が受託側でない)をどちらも一定水準以上にやれるEFC。そんな存在が多くの地域で最も求められており、同時に、最も不足している。



高橋  
直樹

中川町役場職員。2度の総合戦略、1度の総合計画策定を担い、町の地方創生の中心的な役割を果たす。趣味は読書、盆栽、山仕事

EFCは、今、地方創生の現場で最も必要とされている「進化し続ける町内企業」です。各自自治体にそれぞれEFCがあれば、地方創生はもっと進み、深まるだろうと思っています。中川町も喉から手が出るくらい欲しい存在です。



大水  
聡子

「富良野に住みたい」という想いから、中富良野町へ移住。地域おこし協力隊を経て地域プロジェクトマネージャーに。観光/移住事業を通し、関係人口づくりに励む

ANSHINDO改修のお手伝いのため、EFCの皆と2週間一緒に過ごした際、「ルフィ海賊団じゃん」って思いました。それぞれ想いも、得意分野も違うけれど、同じ船の仲間として「oneチーム」で進んでいく感じ。これからは灯台を照らす海賊団でいてね〜!



石川  
陽介

1990年生まれ。北海道士別市にあるゲストハウス&カフェバー「エストアール」代表。いつか上川町の愛山深温泉に行きたい

一言でいうとライバル。EFCの周りには同じ夢を叶えようとする仲間がいて正直羨ましい。熱量の高さが目をひく一方、人には見せない癖のような、泥臭いプレイも魅力的。我々チーム士別も負けずにぶち上げていきます!



中西  
拓郎

1988年北見市出身。「理想を実現できる道東にする」をビジョンに掲げ、北海道東部を拠点に活動するソーシャルベンチャー『一般社団法人ドット道東』代表理事

常にリノベーションしている物件があって、上川町の物件を次々に蘇らせ続けているEFCは近くで見てもすごいなと思っています。これから人流や町の景観がどのように変わっていくか楽しみです。



辰巳  
佳子

上川町出身。辰巳農園直営カフェ『もちごやママ』店長。上川町マスコットキャラクターかみつき一原作者

私は生まれも育ちも上川町で、彼らにはたくさんの刺激と気付きをもらい、さらにこの町のことが好きになりました。田舎特有のネガティブをさらりとかわして前進しているEFC。先住者や移住者の垣根を越えた居心地の良さに繋がっている気がします。



水口  
加奈子

札幌市生まれ。創業メンバー。現在は上川町の移住コーディネーターとして移住者サポートをしている。好きなものは、友達と自然とビール

田舎ではできないとあきらめてしまいがちなことを「ここだからできる」に変える、地域の伴走者。創業期を共にした仲間として、着実に地域に根付いてきた今の姿は私の誇りです。これからは共に汗をかき、面白い未来を一緒に作っていくよね!

## EFC Members

出身地から育った背景、得意なことは  
本当にバラバラで凸凹。  
それぞれの働き方や暮らし方を尊重しながら、  
ねだることなく勝ち取る共同体



稲葉 啓太  
宿泊スタッフ

安念 ひとこ  
宿泊スタッフ

大平 落 央樹  
ディレクター

絹張 蝦夷丸  
取締役

志水 陽平  
代表取締役

谷 幸子  
コミュニティマネージャー

志水 あざ美  
宿泊マネージャー

大村 優介  
コミュニティマネージャー

## おわりに

北海道の数ある自治体の中でも、近年注目度が高まる上川町。今回は、そのまちづくりの実践の多くを担っている株式会社EFCの歩みに注目した。彼ら彼女らの実践は、誰かの正解をなぞるのではなく、そのまち、その関係性に向き合い、その時に合わせてできることを積み重ねる、とてもシンプルなものだった。

ローカルでのまちづくりは、行政や専門家だけのものではない。暮らしている人、関わり始めた人、外から訪れた人。それぞれが自分なりの距離感で関わり、手を動かすことで、まちの空気は少しずつ変わっていく。EFCも最初から「地域との関わり」を掲げていたわけではない。場をひらき、人と出会い、関係を続けていく。その営みがめぐり、誰かの挑戦を後押しし、また次の動きを生んでいった。

この冊子に収めた実践は、完成されたモデルではないし、同じように再現する必要もない。ただ、ローカルで何かを始めるとき、完璧な準備や特別な肩書きがなくても、一歩踏み出すことはできるということとは伝えたい。気になる場所や人に目を向け、できる範囲で関わってみる。その小さな行動が誰かに手渡され、まちの中をめぐり、やがて風土として根づいていく。この記録が、あなた自身のローカルをめぐらせるきっかけになれば、これ以上に嬉しいことはない。





制作 | *efc*.INC

発行 | 経済産業省 北海道経済産業局